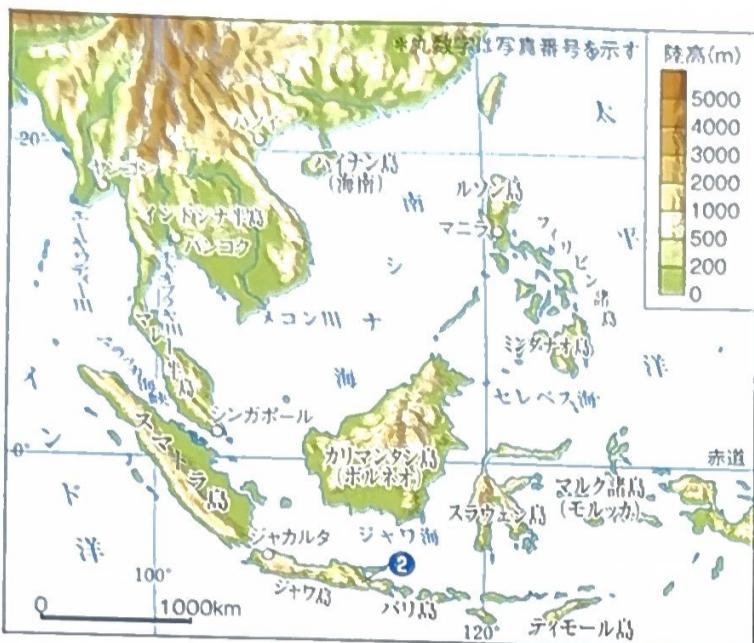


### 3節 東南アジア



▲① 東南アジアの地形(Diercke Weltatlas 2008, ほか)



▲② 噴煙をあげる火山(インドネシア、ジャワ島、2014年撮影)

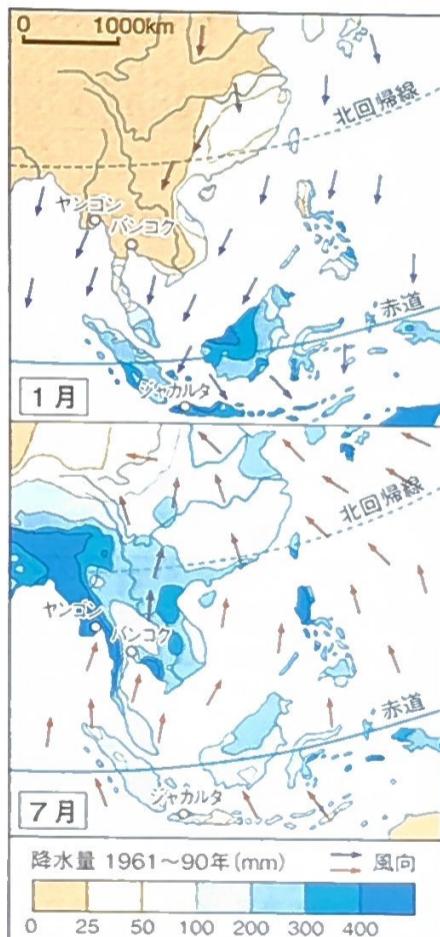
東南アジアのほぼ全域が新期造山帯に属し、数多くの火山がみられる。

●地域の考察方法● 東南アジアは古くから農業がさかんな地域であるが、近年は急速に工業化が進み、地域の姿も多様になってきている。この節では、民族や産業など地域を構成するさまざまな事象を項目ごとに整理して、考察していこう。

#### ●モンスーンの影響を受ける自然環境

東南アジアは、ユーラシア大陸の南東部に突き出たインドシナ半島とマレー半島を中心とする大陸部と、インドネシアやフィリピンの島々を中心とする島嶼部からなる。<sup>とうしょ</sup>ほぼ全域が新期造山帯に属し、<sup>(→ p.34)</sup>地形は複雑である。大陸部では、北部の山岳地帯から南部の平原地帯に向けて、メコン川やチャオプラヤ川などの大河が流れ、河口付近には巨大な三角洲が形成されている。<sup>(→ p.37)</sup>大陸と海洋のプレートの境界に近いインドネシアのスマトラ島やジャワ島、フィリピンの島々には、2000～3000m級の火山が島嶼部の外縁をふちどるように列状をなしている。この付近は地震の多発地帯になっており、海底で発生した大地震により、沿岸に津波の被害が及ぶこともある。<sup>(→ p.33)</sup>

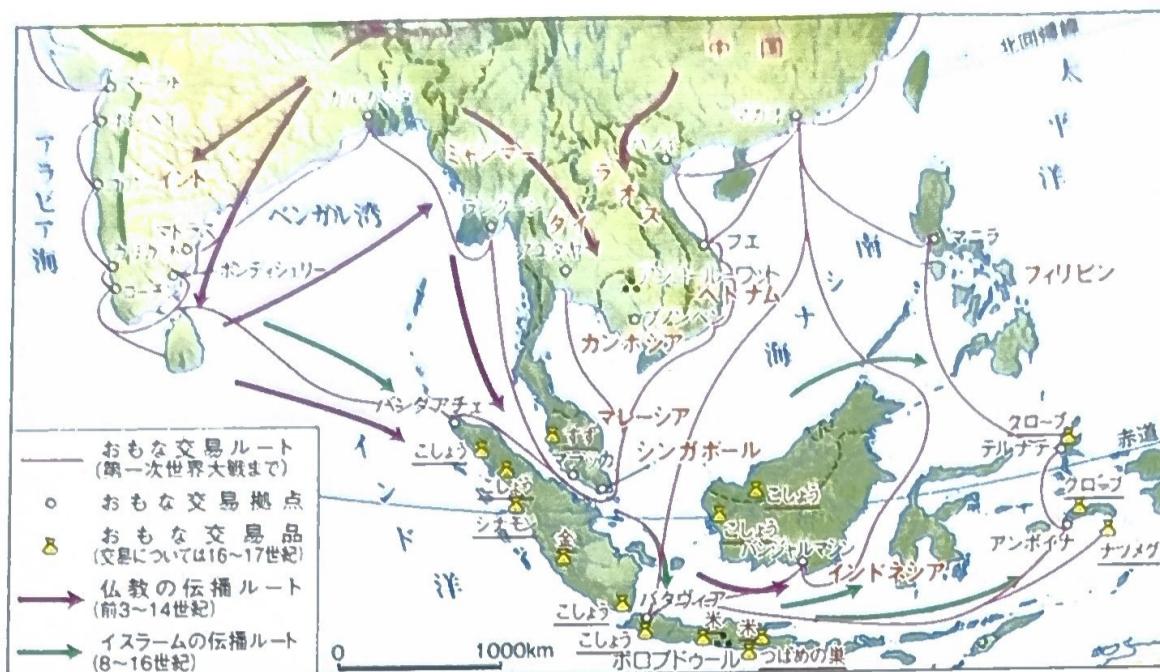
東南アジアの大部分は熱帯に属している。そのうち島嶼部が位置する赤道付近は、1年を通じて雨が多く、熱帯雨林気候になっているが、赤道から離れるにしたがい、<sup>めいりょう</sup>明瞭な雨季と乾季がみられるサバナ気候が現れる。大陸部に位置するタイの平原地帯では、南西の季節風(モンスーン)が吹く5月から10月にかけては雨季となり、<sup>(→ p.53)</sup>河川は増水する。11月から4月は乾季となり、樹木は葉を落とし、大地は乾燥する。季節風のもたらす十分な雨と火山由来の肥沃な土壤は、稻の栽培に適した環境をつくり出しており、東南アジア各地で、雨季に合わせて、古くから稻作がさかんに行わってきた。<sup>(→ p.250)</sup>



▲③ 1月と7月のモンスーンの風向と降水量の変化(CRUデータ、ほか)  
読図 1月と7月では風向はどのように違うだろうか。また、それぞれの季節で降水量がとくに多い地域と、その理由も考えよう。



▲① 街かどで売られるフランスパン(ベトナム、ハノイ)



▲② 東南アジアの交易ルートとおもな交易品(Atlas of the World's Religions, ほか)

読図 仏教とイスラームがどのように伝播したか、たどってみよう。

## リード

図④から、東南アジアには多様な言語と宗教が存在していることがわかる。東南アジアの文化や民族の多様性について、その背景となる歴史とともにみていく。

## リンク

世界の宗教とその広がり(p.210)

# 1 東南アジアの歴史と文化・民族

## 東南アジアの成り立ち

東南アジアは、ともに古い文化をもつ中国とインドの間に位置し、インド洋と太平洋をつなぐ海上交通の要衝にあたる。近代にいたるまで、ユーラシア大陸の南側を東西に結ぶ「海のシルクロード」とよばれる広域的な交易ルートの上で重要な地位を占めていた。<sup>→②</sup> 16世紀にはヨーロッパ諸国の進出が始まり、<sup>→③</sup> 19世紀以降に、イギリス、フランス、オランダ、アメリカ合衆国などの欧米列強の進出が本格化すると、<sup>→④</sup> 緩衝国として独立を維持したタイを除く全域が植民地とされた。こうして東南アジアは、世界市場向けの商品作物や鉱産資源の生産拠点となつた。  
(→ p.101) (→ p.124)

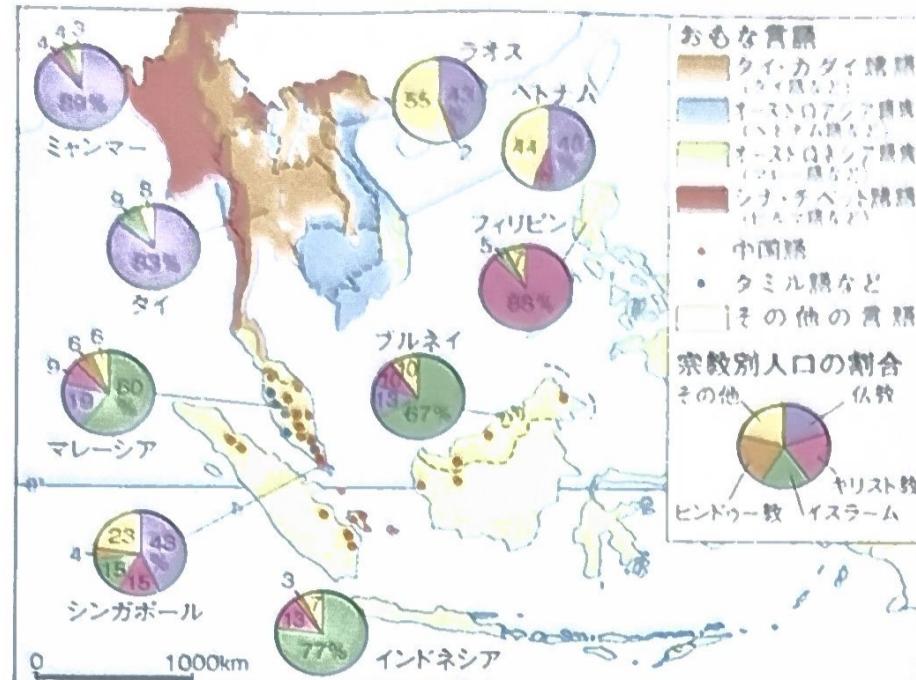
第二次世界大戦が終わると、東南アジアの国々は、あいついで独立を果たした。<sup>→⑤</sup> 文化や制度の面で旧宗主国の影響を残しつつも、各國は、政治や経済、民族や言語をめぐるそれぞれの課題に対処し、独自の国づくりを進めた。その後、1967年に東南アジア諸国連合(ASEAN)が結成され、<sup>→⑥</sup> 東南アジア諸国は、現在にいたるまで経済面・社会面で相互に協力しながら発展を続けている。  
(→ p.252)

## 重層的な文化

今日、東南アジア各地に住むアジア系民族の多くは、古い時代に北方や西方から移動してきた人々の子孫である。さらに東南アジアでは、中国やアラビア半島、インドなどからの商人によって各地の言語や宗教がもたらされ、古くからの文化的要素に新たな要素が入りまじりつつ積み重なり、重層的な文化が形成されてきた。

6世紀ごろから13世紀ごろにかけて、東南アジアの広い範囲に

▲③ 東南アジア諸国への独立への歩み



▲④ 東南アジアの言語と宗教(国立民族学博物館資料、ほか)

読図 各国の宗教別人口の割合を比べよう。



▲⑤ 400年以上の歴史をもつキリスト教の教会(フィリピン、2010年撮影)

影響を与えたのはインド文明である。その後、大陸部では、<sup>(→ p.211)</sup> 仏教が広まり各地に定着した。現在でも、タイやミャンマーのような大陸部の国は、仏教徒の割合が高い。一方、海の交易ルートを通じてムスリム商人によってイスラームがもたらされ、<sup>(→ p.211)</sup> 13世紀以降島嶼部に広まった。そのため、インドネシアやマレーシア、ブルネイではムスリムが多数を占めている。<sup>(→ p.210)</sup> 16世紀以降、スペインによる植民地支配に伴ってキリスト教が伝播した<sup>(→ p.210)</sup> フィリピンでは、現在でもキリスト教徒が多数を占めている。

### 複雑な民族構成

このような歴史を反映して、東南アジアの国々は多くの民族が混在する多民族国家となっている。例えは<sup>(→ p.216)</sup>

マレーシアは、多数を占めるマレー系住民のほかに、おもにイギリス植民地時代の移住者やその子孫である中国系住民やインド系住民、山岳地域に住む少数民族などから構成されている。言語的にも多様で、国語のマレー語のほかにも、中国系住民の間では中国語が、インド系住民の間ではタミル語が日常的に使われている。またシンガポールの街なかでは、多数を占める中国系住民の中国語をはじめ、各民族の言語が話されるが、学校教育や行政、ビジネスの場では、英語が共通語として用いられている。これらの国々では、各民族がたがいの文化を尊重し、共生に努めている。東南アジア各地に居住する中国系住民は華人ともよばれ、独自のネットワークを通じて結びつき、大きな経済力をもっている。マレーシアでは、政府が雇用や教育の面でマレー系住民を優遇するブミプトラ政策<sup>1</sup>をとり、中国系住民とマレー系住民の経済格差の是正をはかってきた。

### プラスα

#### バリ島独自の文化

インドネシアのバリ島では、周辺地域がイスラーム化したあとも、古い時代に伝播したヒンドゥー教<sup>(→ p.211)</sup> が今日にいたるまで信仰されている。バリ島のヒンドゥー教は、ジャワやバリの土着の文化と融合し、インドとは異なる独自の発展をとげている。寺院を舞台とした儀礼が重視され、バリ島の人々の生活と密接に結びつくとともに、重要な観光資源にもなっている。

#### 用語解説

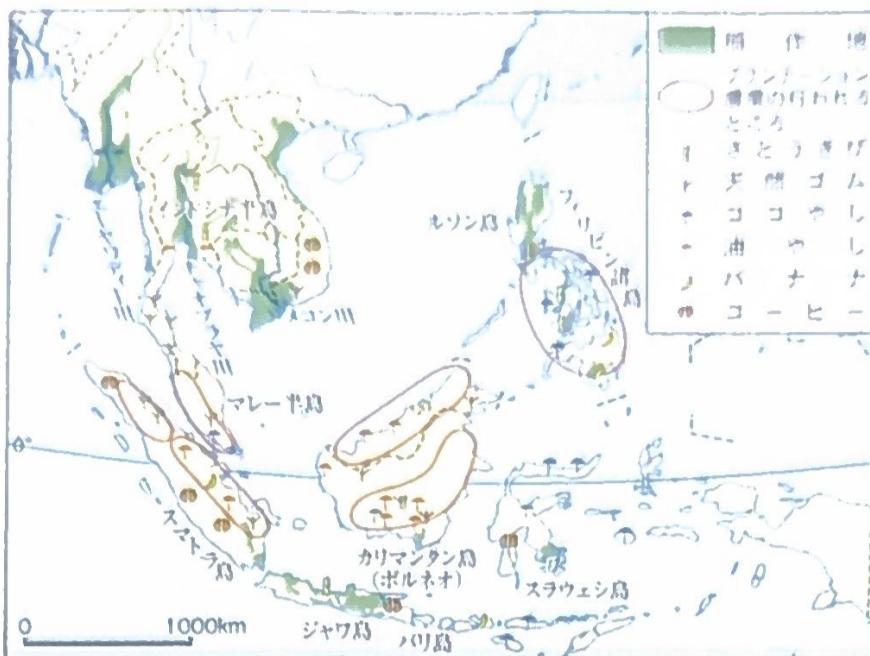
**1 ブミプトラ政策** ブミプトラとは、「その土地に古くから暮らす人々」を意味するマレー語。独立後のマレーシアでは、経済面で優位にたつ中国系住民とマレー系住民の間に対立が起きた。政府は、マレー系住民の農業以外の分野への進出をおし進める政策をとり、民族共存への道を模索してきた。

#### チェック

- 1) 東南アジアの宗教の分布と交易ルートの関係を説明しよう。
- 2) マレーシアで複数の言語が話されている理由を説明しよう。



▲① 機械化された稲作のようす(タイ) 収穫にコンバイ  
ンが利用されている。



▲② 東南アジアの農業地域(Diercke Weltatlas 2008)  
読図 栽培される作物の種類と地域に注目しよう。

#### リード

図⑥のマレーシアの例のように、近年、東南アジアの農業は大きく変化している。東南アジアの農業の特徴と変化をみていく。

#### リンク→

各地で発達した伝統的農業(p.96)  
企業的農業の発達(p.100)

## 2 東南アジアの農業とその変化

### 東南アジアの稲作

▶②  
(→ p.106)

稻の生育期に、モンスーンによる十分な気温と降水のある東南アジアは、世界でも有数の稲作地帯になっている。米の生産は、エーヤワディー川・チャオプラヤ川・メコン川などの中流から下流の三角州(デルタ)地帯にかけての低地で、とくにさかんである。また、ジャワ島・バリ島・ルソン島などでは、傾斜地を階段状にした棚田<sup>たなだ</sup>もつくられている。米の多くは自国での消費に向けられるが、タイやベトナムでは輸出もさかんで、世界有数の米の輸出国となっている。

タイを南北に流れるチャオプラヤ川の周辺には、運河と水路網が水田を縫うように広がっている。この地域では伝統的に、雨季の到来に合わせて水牛を使って田をおこし、直播きによる稲作が行われてきた。しかし、1960年代半ばから新しい品種を開発して収穫を増やす努力が始まられ、こうした伝統的な農業の姿も大きく変化してきた。このような農業の変革を緑の革命<sup>（→ p.102）</sup>とい。生育日数が短い高収量品種の導入と普及がはかられるとともに、灌溉・排水施設の整備、トラクターなどの農業機械の導入、無肥料・無農薬から化学肥料や農薬の投入、近隣農家との共同作業にかわる雇用労働力の利用など、資金を大量に投入する農業へと変わってきた。その結果、タイ中部では灌溉水路やポンプを利用した乾季稲作が急速に普及し、二期作も可能になり、米の収穫量は伝統的な稲作の2倍に増えた。<sup>▶①</sup> インドネシアやフィリピンでも、緑の革命を通じて、自国の米の需要に対する国内の供給能力が大幅に向上した。

#### プラスα

##### 東南アジアの焼畑<sup>やきはた</sup>

東南アジアでは、カリマンタン(ボルネオ)島やインドシナ半島の丘陵地や山岳部で、焼畑が営まれている。十分な休閑期間をとる伝統的な焼畑は、熱帯の環境と調和した持続性の高いものである。しかし近年、とくにインドシナ半島では、商品作物の導入、水田農耕民の焼畑への進出などにより、十分な休閑期間をとらず、植生の再生や土壤の侵食防止などに配慮を欠いた、非持続的な焼畑もみられるようになっている。



▲③ コーヒーの実の品質を確認するようす  
(ベトナム、2011年撮影)



▲④ タイで生産される日本向けの野菜(バンコク近郊) 有機栽培のアスパラガスを選別するようす。

### プランテーションの発達

東南アジア各地には、19世紀以降、欧米

諸国による植民地支配の下で天然ゴムなどの  
(→巻末3回)

プランテーションが数多く開かれてきた。第二次世界大戦後、マレーシアでは、農園経営はマレーシア系の企業に移行し、1970年代以降、合成ゴムの普及で価格が低迷する天然ゴムから、油やしへの転換が進んでいる。<sup>⑥</sup>その背景には、油やしからとれるパーム油の需要の増加があり、<sup>⑦</sup>1980年代以降は、インドネシアでも油やし農園が急速に広がっている。また、フィリピンでは数千haにも及ぶ広大なバナナ園がいくつも開かれている。これらは、1960年代にアメリカ合衆国や日本の資本により開発されたもので、<sup>⑧</sup>多国籍企業の子会社<sup>(→p.141)</sup>を通じて、生産から流通・販売まで行われ、フィリピンのバナナの多くは日本に輸出されている。一方、ベトナムでは1990年代以降、市場開放政策に伴い、南部の高地を中心にコーヒー園が急激に拡大<sup>(→p.254)</sup><sup>⑨</sup>し、コーヒー豆の輸出が急増している。

15

### 農業の変化

東南アジアの農業は、各国の経済発展や経済交流

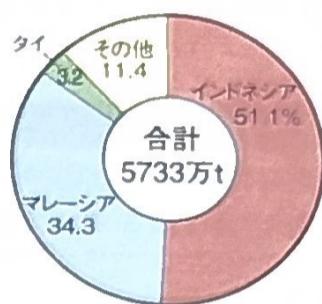
の活発化の影響を受け、さまざまな形で変化しつつ

ある。なかでも工業化の著しいマレーシアでは、農業の労働力不足が顕在化している。また、農業人口の割合が大きいインドネシアでは、貿易自由化の流れのなかで、中国などからの安い農産物の流入

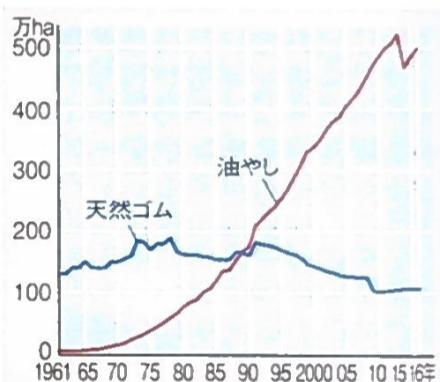
20

によって、伝統的農業が衰退するのではないかと懸念されている。<sup>(→p.96)</sup>

一方、輸出向けの農業関連産業の育成に力を入れてきたタイでは、品質管理や流通の改善により、野菜や果物、畜産物の輸出が拡大している。とくに日本向けには、生鮮野菜に加え、冷凍野菜や調理済みの焼き鳥など、進出した日本企業の技術指導を受け、農産物を現地で加工して輸出する形態が増えている。<sup>⑩</sup>



▲⑤ パーム油の生産国(2014年)(FAOSTAT)



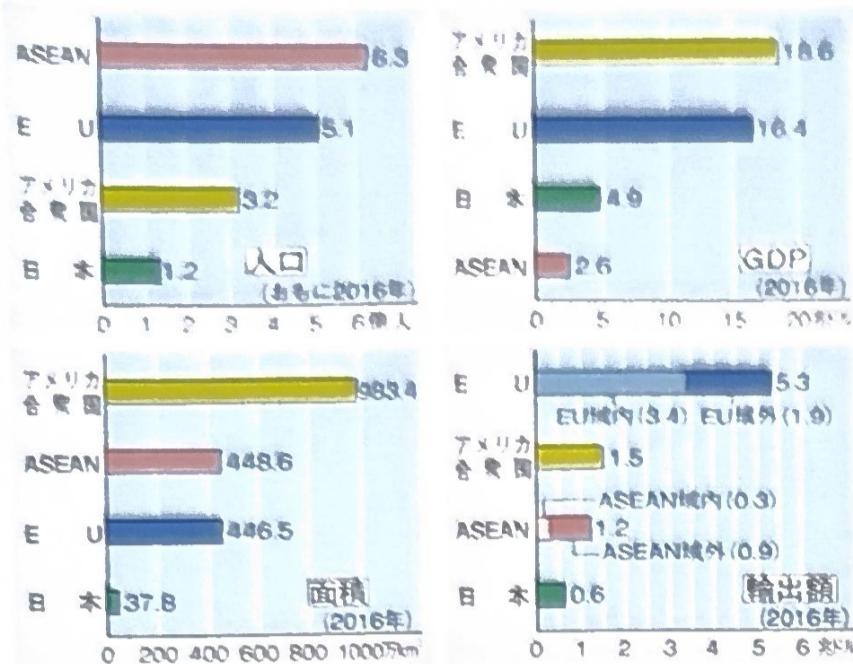
▲⑥ マレーシアの天然ゴムと油やしの栽培面積の推移(FAOSTAT)

① パーム油の需要増加の背景には、世界的な油脂の消費拡大がある。近年では、中国やインドなどの経済発展が、生産コストの低いパーム油の需要増加に拍車をかけている。

② ベトナムのコーヒー豆は、インスタントや缶コーヒーに使われることが多く、低価格を武器に、国際市場でのシェアを急激に拡大してきた。

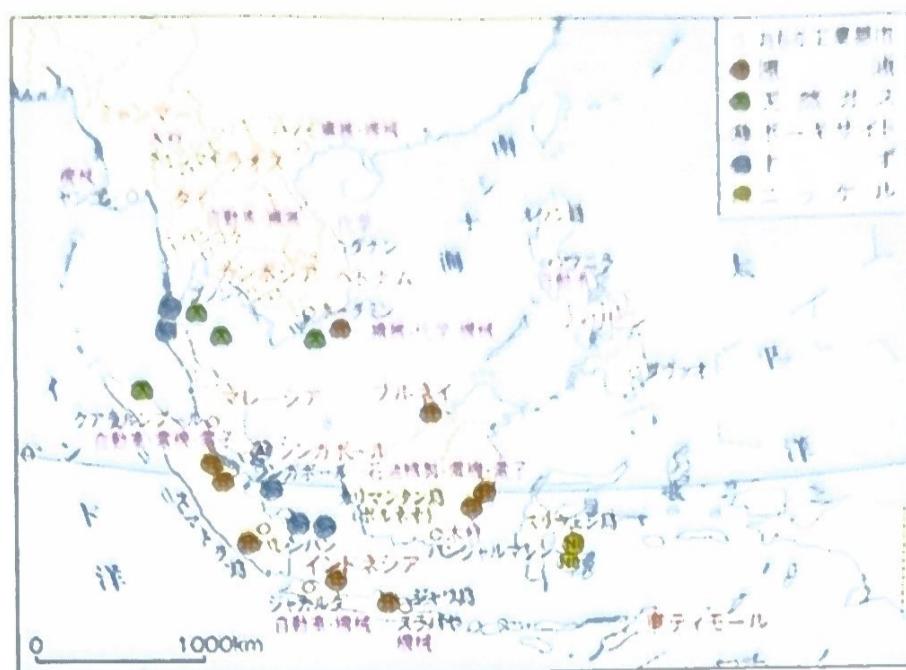
### ✓ チェック

タイで米の生産量が増加した理由を説明しよう。



▲① ASEANと他地域の比較(ASEAN Statistics, ほか)

読図 ASEANとしてまとまる意義を考えよう。



▲② 東南アジアの鉱工業(Diercke Weltatlas 2008)

## リード

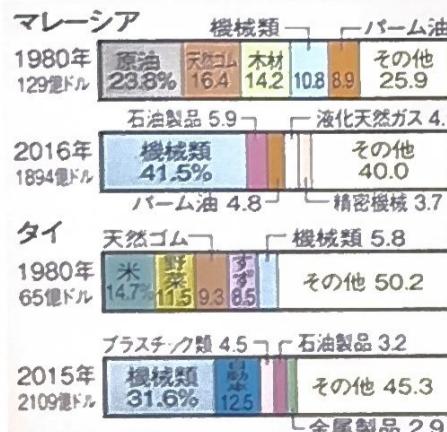
ASEANの結成と東南アジアの工業化の進展をみていく。

## リンク→

新興工業国の台頭(p.142)

年	事項
1967	インドネシア・マレーシア・フィリピン・シンガポール・タイの5か国により東南アジア諸国連合(ASEAN)がバンコクで結成
1972	ASEANとEC・オーストラリアとの域外対話開始
1976	初のASEAN首脳会議開催 東南アジア友好協力条約を締結
1984	ブルネイが加盟
1993	ASEAN自由貿易地域(AFTA)創設
1995	ベトナムが加盟
1997	ミャンマー・ラオスが加盟 日本・中国・韓国とのASEAN+3の対話が始まる
1999	カンボジアが加盟(ASEAN10)
2005	ASEANを含む周辺16か国による東アジアサミット開催
2015	ASEAN経済共同体(AEC)発足

## ▲③ ASEANの歩み



▲④ マレーシアとタイの輸出品の変化(UN Comtrade, ほか)

## 3 ASEANの結成と工業の発展

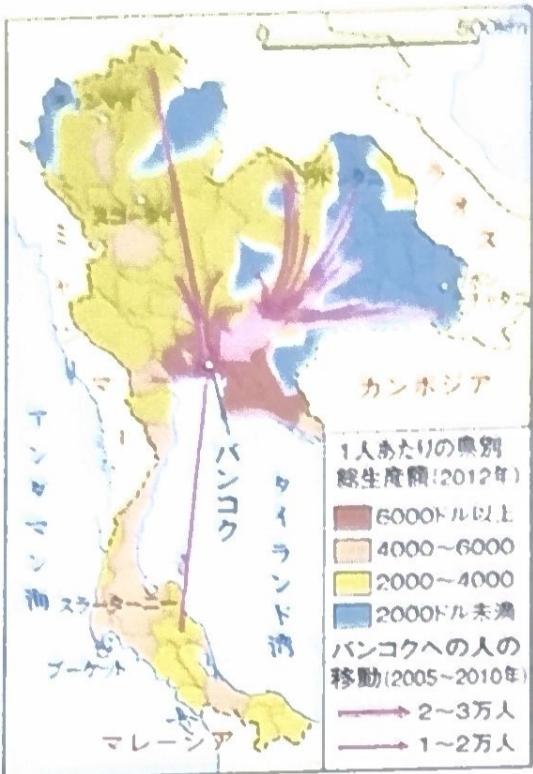
### ASEANの結成と発展

1967年、ベトナム戦争が激化するなかで、インドシナ半島の社会主義勢力に対抗するため、インドネシア・マレーシア・シンガポール・フィリピン・タイの5か国は、

ASEAN(→p.248)を結成した。ベトナム戦争やカンボジア内戦が終結し、政治面が安定すると、ASEANは経済・社会・文化の面での協力をめざして加盟国を増やし、文字どおり東南アジアをまとめた地域連合に成長した。今日、ASEANは工業化の進んだシンガポール・タイ・マレーシアなどからベトナムやミャンマーなどへ企業を進出させるなど、政治体制の違いをこえて域内の人・物・金の自由な移動を活発化させることにより、各国の経済の成長をはかっている。(→①)

外資の導入と急速な工業化 植民地時代、原油やすずをはじめとした、東南アジアの豊かな鉱産資源は、宗主国(→p.124)の富を増やすことを目的に開発されたため、自国の工業発展には結びつかなかった。東南アジア各國は、単一の鉱産資源や農産物の生産と輸出に依存するモノカルチャー経済が共通の課題となっていた。(→②)

第二次世界大戦後の独立以降、東南アジア各國は生活の向上のため、一様に工業化政策をとった。1970年代からは、資本と技術をもつた外国企業を積極的に誘致し、関税などの優遇措置が与えられる輸出加工区を設置するなどして、輸出指向型の工業化を進めた。先進国の企業は、低賃金の労働力や安い工業用地などを求めて次々とASEAN諸国に進出した。その結果、各國の工業化は急速に進み、現在では、多くの国で工業製品が輸出品の第1位となつた。(→③)



▲⑥ クアラルンプールの街なみと高架鉄道(マレーシア)

▲⑤ バンコクへの人口集中(Gross Regional and Provincial Product 2012. ほか)

**読図** おもにどのような地域からバンコクに人が集まっているのだろうか。また、その背景は何だろうか。

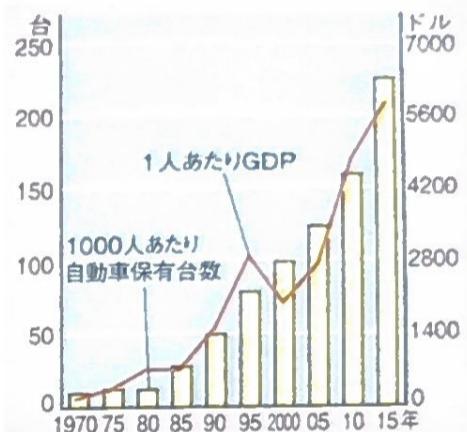
### 工業化の進んだ国々

ASEAN のなかでも、いち早く工業化に成功したのはシンガポールであり、マレーシアとタイがこれに続いた。小さな島国であるシンガポールは、幅広い分野で積極的に工業化政策を進め、アジア NIEs<sup>ニーズ</sup>の一員に成長した。<sup>(→ p.142)</sup>マレーシアは、輸出加工区に外国企業を誘致し、半導体生産の集積地をつくるなどして、電機・電子産業を発展させた。タイには、日本をはじめとする大手自動車メーカーがあいついで進出し、ASEAN 域外への完成車の輸出を行う自動車産業の集積地となっている。東南アジアに進出した自動車メーカーの多くは ASEAN 域内で国際分業体制を組み、相互に部品を供給し合うなどして生産の効率化をはかっている。こうした工程間分業が進んだ要因の一つには、ASEAN 自由貿易地域(AFTA)<sup>(→ p.166)</sup>の発足により、域内の貿易や投資の自由化が進み、各国の経済協力が進展してきたことがあげられる。

### 経済の発展と生活の変化

タイのバンコクやマレーシアのクアラルンプールなどの都市は、工業化の進展に伴い大きく発展した。市街地では高層ビルが林立し、自動車が急増した。道路の渋滞が激しいため、高速道路や地下鉄・高架鉄道といった都市交通機関の整備も進められている。<sup>⑥</sup>

都市部が近代化してきた反面、農村地域では就業機会に乏しく所得も低いため、多くの人々が都市部へと流出している。都市部では、人口増加にインフラの整備が追いつかず、スラムが拡大している。<sup>(→ p.191)</sup>こうした問題は、多くの貧困層を抱えるインドネシアのジャカルタやフィリピンのマニラなどの大都市でとくに深刻である。



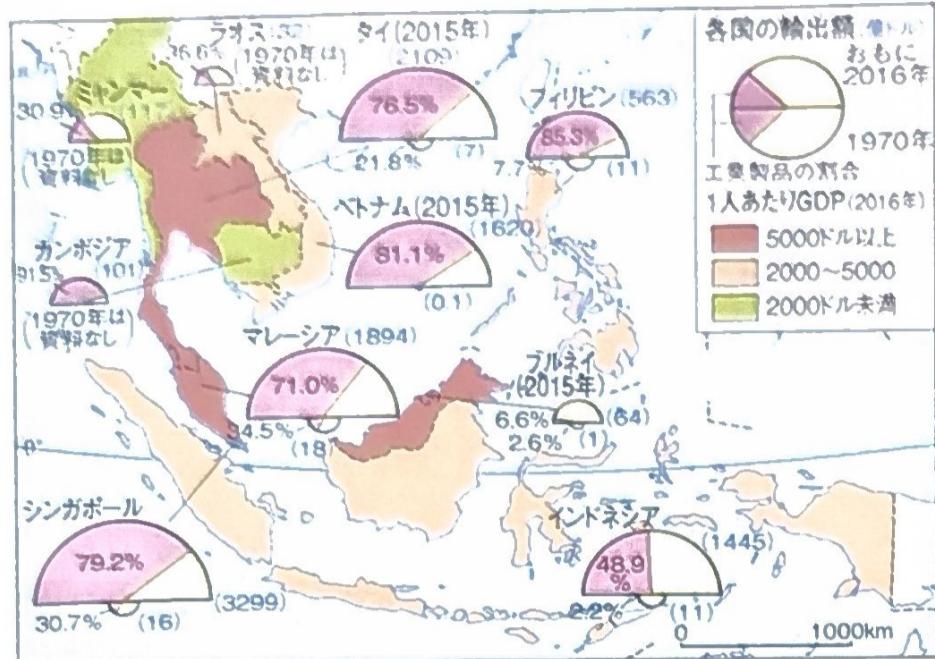
▲⑦ タイの自動車保有台数と1人あたりGDPの推移(2017年世界自動車統計年報、ほか)

### プラスα

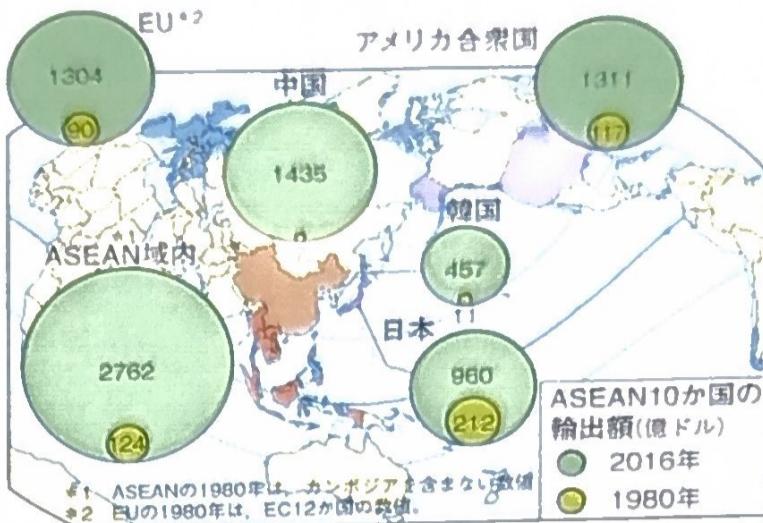
金融センターとしてのシンガポール  
シンガポールには、東南アジアに進出する多国籍企業の地域統括本部が集まっている。さらに、これらの企業に資金を調達する世界の主要銀行が集まり、金融センターとして頭角を現している。その背景には、シンガポールでは英語が実質的な第一言語であることや、都市基盤の整備が進み、治安が安定しており、進出企業の従業員やその家族に良好な生活環境が提供されていることなどがある。

### チェック

シンガポール、マレーシア、タイの工業化の背景を説明しよう。



▲① ASEAN 諸国の 1 人あたり GDP と経済成長(UN Comtrade, ほか)



▲② ASEAN の輸出相手国・地域の変化(ASEAN Statistical Yearbook 2016/2017) 読図 1980 年から 2016 年の間に、ASEAN の輸出額がとくに増加している国・地域はどこだろうか。

#### リード

図①からは ASEAN 各国の経済格差がわかる。ASEAN が抱えるさまざまな課題をみていく。

#### 用語解説

**① ドイモイ(刷新)** ベトナムでは、ベトナム戦争終結後から続けてきた閉鎖的な統制経済が行き詰まり、社会主義体制を維持しつつ、市場経済化と対外開放をおし進めることになった。この政策がドイモイとよばれるもので、経済のさまざまな分野の成長につながっている。



▲③ ミャンマーに進出した日本の衣料品メーカーの工場(ヤンゴン、2012年撮影)

#### チェック

域内格差はどのような問題を生んでいるだろうか。

## 4 ASEAN の変化と課題

### ASEAN の域内格差

インドシナ半島では、第二次世界大戦後も各地で紛争が続き、その影響もあって工業化が遅れた国が多い。ベトナムは 1986 年からドイモイ(刷新)とよばれる市場開放政策をとるようになった。その結果、日本やシンガポールなど賃金水準の高い国から、労働集約的な工業の生産拠点がベトナムへ移転し、工業化が進んだ。(→ p.143) カンボジアやミャンマー、ラオスも内戦の影響や政情不安、経済の停滞が長引き、工業化が遅れていたが、近年はこれらの国々でも日本や中国などの外国企業を積極的に誘致する動きがみられる。▶③ しかし、域内の格差は依然として大きく、賃金水準の低い国々から、工業化が進み賃金水準の高いシンガポールやマレーシア、タイに、合法・非合法の出稼ぎ労働者が大量に流入している。▶④ また、西アジアや台湾など、ASEAN 以外の地域に向かう出稼ぎ労働者も増加している。

### ASEAN のこれから

ASEAN では、域内の政治・経済協力を緊密化させるなかで、域内の経済格差や、各国内の社会階層格差や地域格差の問題を是正してバランスのとれた経済成長をすることが課題となっている。また、ASEAN の周辺では、中国やインドといった巨大な人口を抱える国々が著しい経済発展をとげつつあり、これらの国々と協力することの重要性が増している。2015 年には域内の関税撤廃などをめざした ASEAN 経済共同体(AEC)が ASEAN Economic Community 発足した。これにより、人や物、サービスが自由に移動できる体制づくりが進み、域外からの投資の拡大も期待されている。